

特集

関東支部会の感想

—発表者としてまた—心理学徒として—

尾崎 勝彦(大阪大学大学院人間科学研究科)

1. はじめに—心のバリアフリー—

私自身の発表は、「天文施設におけるバリアフリー(ユニバーサルデザイン)についてのアンケート報告」で、各施設のユニバーサルデザイン設備の現状と課題等の報告でした。発表内容は次号で詳しく報告しますが、本報では発表者として、また天文教育普及には直接関わっていない—心理学徒として感じたこと、思ったことを2、3述べたいと思います。

関東支部会の感想を一言で言えば、とても良い雰囲気だったということです。少なくとも私はそう思いましたし、他の参加者の方もそのように感じておられたようでした。その要因として、ひとつには当然のことながら、高橋真理子さんはじめ山梨県立科学館のスタッフの努力にあることはいまでもありません。しかし、科学館のスタッフの方々には申し訳ないのですが、私が特に感じたのは、あの場における人間そのもののあり方、関係性でした。今回は視覚しょうがいの方がゲストとして参加されましたが、ゲストの皆さん方と健常者とのバリア—心のバリアが少なくとも支部会時にはなかったと思います。この心のバリアフリー(「心のユニバーサルデザイン」とは言わない?)が支部会の雰囲気をとても良いものにしていたと思います。

2. 心のバリアフリーの規定因

この心のバリアフリー成立には、大きく分けて天的要因と人的要因の2つがあると思います。前者の天的要因とは星そのものの持つ力です。支部会の前に我々はプラネタリウムを見学しました。擬似ながら満天の星空を見上げ、星空にまた我々自身に思いを馳せました。さらにそれを強化するような小憎らしい

プログラム「星月夜」も見ました。思いを馳せる—曖昧な言葉ですが、少なくともその一側面として天体と我々の対比が行われ、天体下における我々の日常雑事の矮小さ、人種や民族や身体状況の差異の瑣末さを感じさせられたことでしょうか。これは、どういうことでしょうか? 例えば、Wilber は意識が進化すると完全に自我を否定して、宇宙と一体になり、これが「悟り」、宗教の世界であると言っています[1]。生命科学者の柳澤桂子氏はこれを解釈して、「悟り」にいたらなくとも自我を否定しただけ、信仰を得ることができ、自我を抑制し、謙虚になり、自然に対して畏敬の念を持ち祈る[2]、と述べています。このように星や宇宙は我々の精神を質的に高める働きがあるのではないか、具体的には支部会場ではつまらない心のバリアを除去する働きがあったのではないかと思います。

次に人的要因ですが、参加者が互いに自身を受容し、他を受容しあっていたことだと思います。特にゲストの皆さんは自己のしょうがいを受容されていて、しょうがいと共存しながら前向きに生きておられる、少なくとも人生を楽しもうとされておられる姿がとても良い感じに思えました。ところで、私の世代は小学生時代に「困っている人を助けてあげましょう」というような教育を受け、助けたことをこれ見よがしに学級会で発表していました。これは如何なものでしょうか? 発表ネタとしての援助という本末転倒がありますし、助けてあげる—助けてもらう、といった強者—弱者関係が成立し、当時の我々のような利己的親切押し売り小学生に対して、押し売られた側はどのような気持ちでおられたのかと思います。もちろん支部会においてもゲスト

の方の補助や誘導は行いましたが、日常茶飯事のようにさりげなく、強—弱、援助—被援助という関係性はまったく感じられませんでした。因みに臼田-佐藤さんは07年1月16日付のユニバーサルデザインWGのメーリングリスト(以下、undwg-ML)で、「ハワイでは、車いすのお年寄りや、肢体不自由の方などが当たり前に町中に1人で出て、買い物を楽しんでおられます。そういう方のために(嫌味な感じなく)道をあける、ドアをあけるということも、かなり自然に行われているように思えます…」と述べておられますが、支部会ではまさにこのような状況であったということです。これは互いに他を尊重し、お互いに人間的成長を目指そうという互惠的な大人の関係が成立して初めて可能なことだと思います。

3. まとめに改めて

私の発表は主にバリアフリーの設備に関する事だったのですが、今回参加してみて本来のバリアフリーはお互いの自他受容であって、設備的なものは補助手段に過ぎないのではないかと、極端な場合、設備的には今ひとつでも人的な対応が非常によければ反って良い印象を持たれることもあるのではないかと思います(だからといって設備を整えることの重要性を軽んじるつもりは毛頭ありません)。我々の眼前には予算というとてもないバリアが立ちまわっていますが、お互いの心、態度でそれをすり抜けることも可能ではないか(トンネル効果?)と思った次第です。

そして、その心のバリアフリー化を促進する一つの要因として自然があります。前出の臼田-佐藤さんは同じundwg-MLで、ユニバーサルデザインに関して設備面、精神面共に不十分な日本の状況の中で、自然科学の分野で何が実現できるのか、という趣旨のことを述べておられます。私は自然科学研究者ではないので誤解があるかもしれませんが、自然

科学研究者は職業柄自然の力(魅力)を誰よりも知っている、感じているはずで、その魅力を万民(ユニバーサル)に伝えていくこと、伝えていく工夫をすることが当面、自然科学研究者や科学コミュニケーターに課された使命だと思います。

最後に、しょうがいのある方で天文台や博物館に来ようと思う方、言い換えれば社会と関わりを持とうと思われる方は、既に自身のしょうがいの受容ができている方がほとんどでしょう。その背後、すなわち我々の見えないところにはまだまだ受容されてないしょうがい者本人とその家族がたくさんいて苦しんでおられることを認識しておくべきだと思います。医療職でも福祉職でもない我々が直接彼らに関わることはほぼ不可能かもしれません。しかし、彼らにも自然の魅力を伝えることができれば少しはその苦しみの低減に寄与できるかもしれません。もちろん医療的・福祉的な介入が先決でしょう。しかし、自分を支えてくれる周囲の人に心を開かなかった末期がん患者さんが、木の下で(残念ながら星空の下ではありませんでしたが)「自然と語り合う」と言ったという報告もあります[3]。こういった自然の力の研究は森林系では行われつつありますが、天文系では私の知る限り行われていません。天文系にもその力は必ず存在すると思います。

参考文献

- [1] Wilber, K. Sex, ecology, spirituality: The sprit of evolution, 1995, 松永太郎(訳)、「進化の構造1」、pp.399-437、1998、春秋社
- [2] 柳澤桂子、「宇宙の底で—人格神を超越するまで—」、2005年3月8日付朝日新聞
- [3] 沼野尚美、「癒される人との関わり」、第2回東京生と死を考える会基調講演、2001